黒足袋

吉井勇

青空文庫

私の家をたづねてくる客の中の和服の人は、どうも黒足袋をはいたものの方が多い。それといふのが和服の客は、多く東京からやつてくる、落語家、講釈師といつた種類の人達だからなのである。京都で和服を着てゐるのは、茶道、能楽、骨董などに関係のある人達が多いので、みんな白足袋ばかりはいてゐるが、東京からやつて来る、それらの市井の芸人達は、まず大抵は黒足袋であつて、それも光沢（つや）のある繻子のものは、厭味だと言つて嫌ふのである。

もう五十年来寄席通ひをつづけ、今でも京都では唯一の寄席である新京極の富貴亭の定連株になつてゐる私は、いまだにさういつた芸人付き合ひが止められないので、義理にも黒足袋よりほかはく気にならない。結局黒足袋の持つてゐる庶民的な市井趣味が、私自身の好みや柄に合つてゐるのであつて、白足袋から感じられる貴族的な茶人趣味からは、かなり縁遠い存在らしい。

それにまた黒足袋といふと私には、ちよつと忘れられない思ひ出がある。といふのは今から十数年前、たしか昭和十三年の十一月も末ごろのことだつたと思ふが、当時大阪の萩の茶屋に住んでゐた落語家の三遊亭円馬が、そのころ花月に出てゐた桂文楽を伴れて、土佐から移つて来たばかりの、私の京都のわび住居をたづねてきてくれたことがあつた。円馬はもう中風を病んで、暫く高座を休んでゐる時だつたので、舌も大分もつれ気味で足元も危なかつたが、それをもうその時分大真打だつた文楽が、心からいたはつて世話をしてゐる様子は、かういふ市井の芸人にだけしか見られない人情の美しさを、久しぶりに見せられたやうな気がして、覚えず涙がこぼれさうになつた。その時の二人の姿は、いまだに私の目に残つてゐるが、殊に今猶忘れられないのは、帰り際に文楽から下駄をはかせてもらつてゐる、円馬の足の黒足袋である。

かうして私はある種類の人達からは、下品だとか、俗悪だとか、嗤笑されるかも知れないけれど、おそらく一生黒足袋をはきつづけてゆくことであらう。

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆38　装」作品社
　　1985（昭和60）年12月25日第1刷発行
　　1999（平成11）年10月20日第13刷発行
底本の親本：「定本　吉井勇全集　第八巻」番町書房
　　1978（昭和53）年6月
入力：門田裕志
校正：noriko saito
2010年12月3日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

黒足袋

吉井勇

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/